

現場に足を運び 目と心で巨樹と 向き合う 利根町の日本画家

シリーズ まち・ひと・しごと # 33
日本画家 石村雅幸さん



雅幸画房 日本画教室

300-1636
利根町羽根野 880-138

あり

tel : 0297-68-8074

e-mail : nihon-ga@i.softbank.jp

無料体験随時受付中

教室に関する
詳細はこちら



純和風建築のアトリエには、絵の具や刷毛などのほか、日本画に関する参考資料も多く揃えられており、技術だけでなく知識を深めることもできます

利根町羽根野の閑静な住宅街に、木をふんだんに使った純和風建築のアトリエがあります。樺の太枝のアーチ状の横板を潜ると「雅幸画房」と書かれた木看板があり、風情溢れる外観からはどこか懐かしい温もりを感じます。

今回は、巨樹を描く傍ら、アトリエで日本画教室を開いている、羽根野在住の日本画家、石村雅幸さん（55歳）をご紹介します。

絵描きの情熱的な生き方に感化

石村さんと絵の出会いが小学4年生のとき。

友人に、東京国立近代美術館に誘われ、そのときに上映されていた「レオナルド・ダ・ヴィンチ」の伝記映画と、同時期にお父様と見に行った「ゴッホ展」で、絵描きの情熱的な生



再興第81回院展「暮色塔影」(京都・八坂の塔)

きざまに感化され「自分も絵描きになりたい」という夢を持ったそうです。

日本画家を目指したきっかけについて、「高校2年生のとき、渋谷で開催された『日本画家山口華楊』の展覧会を見て、日本画が伝えてくるものの深さに衝撃を受けました。華楊の作品には、吸い込まれるように長い時間見入りました。そのときに、日本画をやるうと決め、玉川大学に進学し、4年間日本画の基本的なことについて学びました。」と話してくださいました。

古建築から巨樹へ

子供の頃から職人の仕事を見るのが好きで、日本画のほかに建築にも興味があった石村さんは、大学の卒業制作で平等院鳳凰堂を描きました。以降、古建築いわゆる神社仏閣を描き、日本画を志す人なら誰もが入選を夢見る「日本画の最高峰」といわれる「日本美術院展覧会(院展)」で、

毎日のように現場に通っていると、現地の方が声をかけてくれ、差し入れをいただいたりもします。

その後も、手紙のやり取りをしている方や展覧会に来てくれる方もいて、人の温かさを感じる事ができます。」と答えてくださいました。

自然と真剣に向き合い、見る人を引き付ける作品を描くことができる石村さんだからこそ、絵を通じた人との出会いがあるのかもしれない。

日本画家として生涯現役

今後について何うと「画家として生涯現役でいたいんです。」

日本画の考え方は「絵というものは、人が人に教えられるものではなく自然(題材)が一番の先生だ」という考え方があふれています。自然が教えてくれるものは無限大なので、自分のエネルギーをこれからも「巨樹」にぶつけていきたいですね。

また、現在、教室には6名の方が通っています。一人一人の個性に合わせて指導し、その人が描いた絵を壊さないように気を付けています。上手い絵が良い絵ではなく、その人の人生や価値観が反映されていれば、見る人には十分伝わります。これから、教えるよりは気づいてもらうと



石村さんが描いた蛟蛸神社の絵馬。絵馬のほか、御朱印帳や幣殿天井画も描かれています

初入選から10年連続入選という快挙を成し遂げました。

しかし、翌年は落選。それを逆にチャンスと捉えた石村さんは、いつか本格的に描きたいと考えていた「樹」へ題材を変更しました。

「樹そのものに興味があり、古建築を描いているときも、むしろ柱の木目に目が行くことがあったんです。

また、このとき、子供が生まれ父親になった時期でした。私には、巨樹の姿に家族を守っていく父親の強さや包容力みたいなイメージがあって、自分の理想と樹を重ね合わせていたのかもしれない。」と笑顔で話す石村さん。

家族の存在や自然が生み出す無限のエネルギーが石村さんの活動の源になっているようです。

巨樹の定義は、幹回り3m以上とされており、茨城県は該当する樹が多く、町内では、これまでに「蛟蛸神社の銀杏の木」や「早尾天神社のスダジイ」などを何度か描いています。

いうところを意識して、後進の育成に携わっていきたくたいです。」と話してくださいました。

石村さんの作品は、牛久市や市周辺に在住する作家さん55名の作品200点を紹介するネット上の展覧会「作家の足跡」(うしく現代美術展実行委員会主催)でご覧になれます。

令和3年3月31日まで公開されていますので、パソコンやスマートフォンなどから「作家の足跡」を検索していただき、ご覧になってみてください。

自然と本気で向き合い、一筆一筆に思いを込めて作品を描く石村さんの制作活動はこれからも続きます。

目と心で巨樹と向き合う

作品を描く際、大切にしていることについて、「現場に足を運び、自分の目と心で巨樹と向き合い対話することを大切にしています。描く樹を決め、連日現場に通い、約1ヶ月写生をしたあと、アトリエにて約2ヶ月かけて絵を完成させます。

私にとって、写生の時間が大切に、時間をかけた分、いろんな気づきがあり、自分の目で捉えたものを描くことができます。題材と向き合ったこと、描き手の人生や価値観が絵にのり、見てくれた方に描き手の思いが伝わるんです。



1



2

1. 第73回春の院展「宮守」(蛟蛸神社の門の宮の銀杏)。2. 再興第97回院展「静談」(早尾天神社のスダジイ)